

議論すること、拝尿すること、祈ること、気分を良くすること、気分を悪くすること——この全てが「感じる」こと、見る「こと」、聞く「こと」ととつての素材である。

あなたは「感じる」こと、見る「こと」、聞く「こと」を選択的に実践したいという誘惑にかられ、多分、楽しさを増進させる何か素晴らしいことが起こっている時にそれを実行したり、あるいは、感情的な苦痛を味わっている最中に、それが痛みを軽減してくれるかどうか確かめるためにそれを試したりすることだろう。これは、とりわけ、あなたがこの実践をやり始めたばかりで、自分が何をできるかについてまだあまりにも低い考えしか持っていない時に起こりやすい。全く何もしないよりは、少なくともその時自己想起をしているほうがましである。けれども、そのような選択的な実践を続けていると、楽しさの追求のために真理の追求を放棄してしまい、後で厄介なことや苦しみを引き起こすような仕方でも実践を歪めてしまう。もう一度思い起こしていただきたい。

現実以外にいかなる神も存在しない。

それ以外のどこかに神を捜し求めることは、
墮落した行為である。

あなたが、現にあるものがあなたの好むものであるかぎり、それを知りたいという態度で臨む時はいつでも、あなたは厄介なことに陥るはめになるのである。

自己観察と自己想起

私は、自己観察と自己想起を別個の実践として述べてきた。それらはいくつかの点では異なっているが、しかし他の点ではかなり類似しているので、自己観察が発点となって、自己想起になっていくことができる。共に注意の意図的な行使を伴い、そして共にあなたの世界とあなた自身についてのより明瞭な知覚をあなたに与えることができる。主な違いは注意の源にある。

自己観察は偽りの人格のレベルから行うことができる。ある一つの「私！」がその行動のさまざまな側面を観察するのである。複数の「私！」の部分的または全面的な共意識——ひたむきな実践でもたらされる見込みのある何か——の場合には、一つの「私！」が他の複数の「私！」の働きのいくつかを観察することができる。普通の心は普通の心に注意を払う。あなたは通常よりはよりはっきりと何かを見ることはできるが、しかし自分が観察に持ち込む偏った特性を見ないかもしれないし、あるいは自分が観察に夢中になりつつあることに気づかないかもしれない。

自己想起でも同じ内容の世界および体験を観察することができるが、しかし観察のレベルまたは源が異なる。注意を分割し、それによって両腕両脚中の感覚のような何か他のものに同時に注意を留めながら、通常よりもずっとよく観察してられるようにすべく行使される意図的な意志は、普通の心の外側のレベルで作用する機能を創り出す。あなたは起こりつつあることに心を奪われない。あなたが——「独立して」という用語が通常用いられているよりもはるかに大きな意味で——独立して存在する、そういう仕方があるのだ。

この相違を述べるために私が用いている言葉はあまり満足のいくものではない。私は、直接的体験

によつて自分が何を言わんとしているかを知っているが、しかし言語はそれを伝えるのに十分ではないのである。

ここでは、馬と馬車と御者のたとえ話が助けになりうる。時々御者は、馬車の特質や、あるいは自分の服装が当世風ではなく、他の御者たちに悪い印象を与えるだろうということに気づく。彼は、生れつき御者として自分が持っている種類のものの方から、それらのことに気づくのである。また、時々馬は御者の行動のさまざまな側面に気づくが、それは馬のものの見方からそれらに気づくである。たとえば、御者の体臭は、御者自身さえ気づいていない非常にはっきりしたことを馬に伝えるかもしれないが、しかし御者の服装のスタイルは馬には何ももの意味しない。これは自己観察に似ている。われわれは、自分の通常の、自動化した合意的トランス・偽りの人格のものの見方の多くを、自己観察に持ち込むのである。これは、それが有用ではないということではない。それは第四の道の出発点として非常に役立つ、絶対的に必要なのである。

自己想起は、その場面に到着して、それを観察している主人のようなものである。主人は、たとえ馬と馬車と御者の輸送手段を使い、それに影響されるかもしれないとしても、その外側にあり、それとは違うのである。主人はそれを観察し、それと掛り合うことはできるが、しかし自分は馬、馬車および御者とは違う存在であることを自覚し続けるのである。この優越した、外的な立場から、彼は、馬や馬車や御者や、あるいはそれらの組み合わせには不可能な事柄を見、そして行動するのである。自己想起中、あなたはこれまでよりずっと生きいきしているが、にもかかわらずあなたは通常のあなたの自己以上で、——それとはかなりはつきりと異なる、——存在なのである。

再び、私はこれらの言葉に満足していない。けれども私は、自己想起のなんらかの体験をした他の

誰かには、かなりよくこれらの言葉の意が伝わることを知っている。私は、第一章で言及した、部分的に状態特定のななんらかの知識を伝えようとしているのである。それゆえ、この説明からできるだけ多くの意を汲んでいただきたいが、しかし自己想起を実践することによってそれを現実のものとしていただきたい。

本章では、自己想起の実践の初歩について論じた。自分の世界のことを能動的に知覚しながら自分の両腕両脚を感じることは、技法的に便利な始め方である。究極目的はあなたの自己の全てを想起することである。この全てはこの時点でのわれわれの知識を超えているが、しかしわれわれは端緒を開くのである。

私はメロドラマ的な表現は好きではないが、実を言うと、自己観察と自己想起を長期にわたって実践すれば、あなたの人生を完全に変えることができるのである。

【原注】

(1) 安定化のプロセスについてのより詳細な議論については、拙著「意識の諸状態」を参照のこと。

第十九章 高次の意識

われわれは第一章の冒頭で「意識の諸状態」を定義し、その概要を検討した。それについて簡単に復習しておこう。

われわれは、任意の個人のある個別的な意識状態のことを「複数の心理的構造の、ある独特な布置ないしシステム」と定義した。識別可能な心の諸部分ないし諸側面は、ある一定の種類のパターンないしシステム内に配置される。いずれかの瞬間にわれわれの心が働く厳密な仕方には、常になんらかのパリエーションがあるが、これらのパターン全体の一つはしばらくの時間持続し、同じものとして認識され続ける。ある状態のパターンには、全体的な「感じ」ないし「味わい」があるのだ。

一つの個別的な意識状態内で働いている諸構造は、一つのシステム——その諸部分が、フィードバック制御によつて相互の働きを安定化させるようにできている、そういうシステム——を作り上げ、そのため、環境の変化にもかかわらず、個別的意識状態はその全体的活動パターンを維持するのである。けれども、一定の基本的な環境的刺激がやつて来ると、そのパターンが崩れ、別のパターンに取つて代られる可能性がある。たとえば、なんらかの個人的批評が一つのアイデンティティ状態から別のそれへの移行を引き起こす場合である。

もしある状態が、われわれが物事を比較する際に照らし合わせることを望む一定の基準的状态から分離できるほど異なっていたら、それは変性状態である。われわれは、普通、日常の目覚めている意

識状態を比較の基準にしているから、夜中の夢見のような状態は変性状態ということになる。その他よく知られた変性状態の例としては、催眠状態、アルコールのような精神に作用する薬物によって誘発された状態、激しい怒り、パニック、抑鬱、高揚感のような強烈な感情に取りつかれた状態、瞑想的な実践によって誘発された状態がある。

われわれは、一般に、われわれの通常の意識状態について、あたかもそれが単一のものであるかのように語る。だが、アイデンティティ状態についてのわれわれの議論を仮定すれば、通常の意識はアイデンティティ状態の集合であることがわかる。ほとんどのアイデンティティ状態は合意的意識の許容限度内で機能するので、それらは、催眠のような明らかに異なった状態が変性状態として認識されるような仕方、変性状態として認識されることはない。各々のアイデンティティ状態は合意的トランスの一面面である。他の状態のことを異なった意識あるいは変性意識と断言する基準として通常の意識を用いることが、われわれが通常なしうる最善のことかもしれないが、しかしそれはかなり正確さを欠いている。

第一章で私が与えた意識の諸状態の正式の定義は私の初期の科学的研究から引き出されたものであり、その元々の用途のために入念に選ばれた特徴を持っている——それは価値から自由なのである。それは、意識の精神のおよび感情的な機能についての正確かつ純然と学術的な記述であることを目標まわっており、記述されている特定の状態が靴を買っている誰かのそれであるか、祈祷中の聖人のそれであるか、絶望の淵をさまよっている躁鬱病患者のそれであるかどうかは関係ない。

私は、元々、科学界で変性状態の研究を合法化するための試みの一部として、意識の諸状態の定義を導入したので、こうした価値から自由なアプローチが必要だったのである。価値を扱おうと「客観

性」が歪められるので、科学は価値を扱うべきではない、と多くの科学者が信じている。これは多くの場合に本当であるが、しかしそれは、われわれはいかなる仕方でも決して感情や価値を扱うべきではないということの意味するとうふうに解釈されると、危険な半面の真理と化してしまふ。

われわれは明らかに、評価と観察結果を混同しないことが必要である。あなたが実際は自分の感情や価値について話しているのに、自分は出来事について事実に即して話していると思うなら、あなたは科学的にまづいことをしている——あるいは、自分の人生をまづく生きている——のである。事柄が外的な事実の一つである時、自分は価値を論じているともしいあなたが信じるなら、同様の間違いを犯すことになる。

同時に、価値は単に主観的ではない。それらは感情脳が得た観察結果であり結論なのである。それらは、あなたの感情脳の機能の特質に応じて、神経症的な空想かもしれないし、ある状況のもっとも重要な側面かもしれない。それらを見捨てることは現実のいくつかの部分を見捨てることである。第十四章で論じたように、これは三つの脳の間違った働きに帰着し、われわれの機能を歪めることになる。それは、また、現代科学におけるわれわれの宇宙観の大きな歪曲をもたらしてきた。現代科学は、人生の感情のおよび直観的側面を見捨てる、自分が持っている客観性を持っているふりをしてるので、それは、暗黙の、隠れた、そして人間の精神／霊を傷つけてきた、往々にして衰弱させる感情的仮定や価値に満ちている。西洋心理学の隠れた仮定についての私の研究は、こうしたことを追求したいと思っている読者の役に立つであろう。

もしわれわれが人生についての包括的な科学を求めているなら、完全に価値から自由な態度は、特にそれが恐怖および感情的脳についての貧弱な理解に基づいている場合はうまくいかないであろう。

本書における実践志向を仮定すれば、明らかにそれはわれわれにとってここでは望ましいことではない。われわれの議論はしばしば技法的な趣きを持つてきたが、にもかかわらずそれらは人生により大きな幸福と達成を見出すことの問題を繰り返して扱ってきたのである。

どうすれば私は人生の歪みを正し、合意的トランスから目覚め、自文化の制限を乗り越え、世界および自分自身の本質ナッセンスの現実を発見することができるのだろうか？ どうすれば私はこの世界での人生の質をより効果的に改善できるのだろうか？ どうすれば私は、多数の「私！」の現在の断片化の代りに、統一に至ることができるのだろうか？ そのような目的は、明晰な知覚のほうに歪んだ知覚よりもよいとか、自由のほうが束縛よりもよいといった一組の価値を含んでいる。この観点から見れば、さまざまな意識状態はより良いあるいはより悪い、助けになるあるいは妨げになる、高次あるいは低次である。第一章で論じたように、少なくとも適切に用いられる時は、聖人の状態のほうが靴を買う人や躁鬱病の患者のそれよりもはるかに有益で、高次かもしれないのである。

四つの意識レベル

グルジェフは、意識は四つの主要なレベルのいずれにおいても機能できると述べた。各々のレベル内にさまざまな状態が存在しうる。われわれはこれらのレベルを以下のように呼ぶことができる。

(a) 通常の睡眠と夢、(b) 合意的意識または通常の覚醒状態——われわれが諸状態を評価する時には、より適切に合意的トランスと呼ばれる、(c) 自己想起によって特徴づけられる真正の自己意識、および(d) 客観意識。それらは、とりわけ、断片化から統一への前進を構成する。

通常の睡眠と夢

通常の睡眠と夢のレベルとは、われわれが普通考えたとおりのもの——夜間、寝ている時の心的活動（または、それがない状態）——である。グルジェフは、睡眠レベル内での睡眠状態と夢見状態との区別を減多に気にしなかった。類比として以外、彼は夜間の夢を扱うことはなかった。夜間の夢から覚めて合意的トランスに入る時、われわれは一般に、夢を見ていた時より自分の心がずっとはつきりしていると感じる。同様に、自己想起している時——真正の自己意識の状態にある時——には、合意的トランスのほうが夜間の夢よりもずっとはつきりしていると同じくらい、自分の心のほうが合意的トランスよりずっとはつきりしているのである。

夜間の夢は、非常に高いレベルの現実のシミュレーションを伴う状態である。夢の世界全体が削り上げられるのである。夜間の夢の中では、合意的トランスに比べて、われわれの経験ははるかに広範囲に及ぶ。これは、シミュレーター（シミュレーションの主体）が、外的な刺激によってかなりの程度まで制約されることがないからである。目を通して入って来てシミュレーションに含められなければならない視覚パターンもなく、したがってどのような視覚的光景もシミュレートすることができるのである。唯一の制約は内的なもの——偽りの人格の特徴や防衛機制によって与えられるもの——だと思われ、そしてこれらの制約は合意的トランスにおける場合よりずっとゆるやかである。「私」の特質がほとんどいかなるものにも付加されることができ、したがって時々夢の中で自分がしていることに気づく「特徴のない」行動が現れるのである。

合意的トランスは、その中でわれわれが自己観察や自己想起を實踐できる意識のレベルであり、し

たがって夜間の睡眠時の空白や夜間の夢見時の空想よりもずっと高いレベルである。けれども、夜間の夢のほうが合意的トランスよりもはるかに安全な状態であるという、非常に現実的な感覚がある。³夜間の夢の中では、われわれの身体はわれわれが夢に見ている行動を實行したりしない。夢の中の崖から飛び降りたり、夢の中の人々を怪我させたりしても、その結果われわれが目覚めた時に骨折したり、敵を持つたりはしない！

現代の睡眠に関する研究は、われわれが夢を見ている時は筋肉の能動的な麻痺があるので、われわれは夢を行動化することはできない、ということを実証した。しかしながら、合意的トランスではそのような保護は存在しない。これまで見てきたように、われわれは、物質界、他の人々、および自身自身の感情の実際の現実に対する部分的な志向しか持っていない。目覚めた状態での夢の中に生きているのである。世界シミュレーション・プロセスは、夢の中でとちように同じように、合意的トランスの中で進行しているのである。それが夢の中でよりも多くの制限を受けるのは、シミュレーションに送り込まれなければならない膨大な感覚情報があるからである。われわれのさまざまな偽りの人格は完全に文化適応させられてきており、われわれのシミュレーション、思考および感情の範囲をさらに限定しているのであるが、これに反して、われわれの夢の中の自己は、最初の否認後、たいいはほったらかしにされてきた。しかし、われわれは歪んだ知覚、思考および感情に基づいて行動し、その過程で自分自身と他の人々に影響を及ぼす可能性がある。合意的トランス状態で行う対外的行動の反応的結末が、無益で恐かしい苦しみの主要な原因なのである。

合意的トランス

われわれの人生の約三分の一は夜間の睡眠と夢のレベルで過ごされ、残りの三分の二は合意的トランスの中で過ごされる。合意的トランスは、実はさまざまなアイデンティティ状態の集まりである。その中でわれわれは歩き、話し、約束したり約束を破ったり、愛を交わしたり、戦争をしたりし、そして自分は第三の意識状態、真正の自己意識の中にいると想像するのである。

すでに本書全体を通じて合意的トランスの特徴を詳しく論じてきたが、しかしここで私はさらにもう一つの側面を強調しておきたい。われわれは、自分たちが真に自己を意識しており、自分がしていることを知っており、自分自身の意思決定をしており、自分自身の心を理解しており、自分は一つである、と信じている。この種の錯覚は特に有害である。なぜなら、自分がどれくらい真の統一性、自己意識、自己理解および意志力に欠けているかを知らなければ、これらのものを求めようとする気持ちやわれわれに起こることはないからである。さらに、それらのことを耳にする時、われわれはそれらを通常の思考レベルに還元し、したがってそれらが持っているわれわれを変容する潜在的な力を台なしにしてしまいかねない。

本書の執筆中、私は時々こんなふう思った。「こうした全ての努力は無駄だ。すでに自分が持っていると信じている能力を開発するために一生懸命努力しなければならぬなどとは、誰も思わないだろうから！」けれども、これを実行することはわれわれの存続にとって決定的に重要である。合意的トランス状態にある自動機械がこの惑星に平和をもたらすであろうか？ 確かに単なる論証だけでは、たとえそれを私がどれほど器用にこなそうと、われわれの置かれている状態を真に伝え

ることはないであろうが、しかしもし私があなたをそそのかして自己観察と自己想起をし始めさせたなら、あなた自身の体験が私の話のポイントに通じさせるであろう。

真正の自己意識

第三の意識レベル——自己想起の状態——は、われわれの自然な生得権である。その中でわれわれは、合意的トランスの中にいる自分に誤って帰している諸々の特質を持つてであろう。われわれは自分の行動と内的状態を真に自覚し、世界をはつきりと見、三つの脳の全てを見事に調和的に働かせ、自分の本質の願望を悟り、そして自分が願っていることをするための真の意志を持つてであろう。われわれはとうとう一つになる。私は正真正銘「私だ」と言うことができる。なぜならそこには、合意的トランスのつかの間のアイデンティティ状態よりもはるかに生きいきした、重要な真の自己があるからである。

ほとんどの人にとって、この第三の状態はいにく合意的トランスを中断する稀な閃光としてのみ起こるだけであり、われわれが再び眠りの状態に陥ると、すぐに忘れ去られてしまう。前の二章で紹介した自己観察と自己想起のエクササイズを実践した結果として、この私の発言があなたにとっては当てはまらなくなっていることを、あるいははいずれ当てはまらなくなること、私は望んでいる。

初めの数章から、あるいは自分を観察し覚醒しようとするあなた自身の試みからなおいっそう理解されるであろうが、自分が合意的トランス状態にいることを人々が実感することは容易ではない。事実、人々にある特にかたくなな反応が起こって、そのことを知ることからさらに彼らを遠ざける。も

しあなたが誰かに「あなたは真の自己意識を持つていない」と告げたら、彼は一瞬間部分的に目覚め、自分が気づいていないことを否定している、そういうある種の自己意識により近づくであろう！ ストレスが時々われわれを「今ここ」によりいっそう強烈に集中させる効果を持ち、それによってわれわれの錯覚からエネルギーを奪い取って、よりいっそうわれわれを現実に近づけ、より生きいきと感じさせてくれることがある。危険なスポーツが一部の人々に人気があるのはこのためである。現実や本質エッセンスに無感覚になるよりは危険の中で生きいきしているほうがましなのである。だが、自己想起によって生きいきすることを覚えるほうがなおいっそうましである！

ここで、実践としての自己想起と、その実践の結果ある特定の時に生じるかもしれない生じないかもしれない機能レベルとしての真の自己意識とをはっきり区別しなければならぬ。自己想起はプロセスであり、あなたの中の心に観察し統合する部分を生み出し、それによってあなたが自分自身に何をしているかを知るべくあなたが実行する、特定の種類の心的活動である。あなたはそれに懸命に取り組むこともできるし、あまり精力的に取り組まないこともでき、そういうわけでさまざまな程度の成功を収めることができる。自己意識の状態は、あなたの自己想起の試みの結果かもしれない。³

時には、自己想起を試みてからすぐに真の自己意識の状態に至ることがある。外界と自分の内的プロセスの両者の知覚が鮮明になり、新しい、本当の仕方で真正銘存在しているという、言葉で言い表わしたい特質が現出する。この第三の意識状態である自己意識は、ほんの一瞬しか持続しないかもしれないし、もっと長い間持続するかもしれない。その個々の例がますます頻繁に起こり、その各々の持続時間がますます長くなると、それは明確に異なる意識状態としてますますはつきりと認識できるようになる。

自己想起を初めて実践し始める時にもっとはるかに頻繁に起こることは、あなたが主に新たな、素晴らしい明晰さを体験するどころか、むしろ明晰であることの難しさと、あなたの人生を突き動かし、ている自動的な思考プロセスの力を実感するということである。合意的トランスのレベル内でのあなたの深さに変化があったり、それを明晰に観察するようにはなったが、しかし正真正銘の自己意識という変性した高次の状態にはまだ到達していないのだ。

私がついたりだと思ふ類比は水中遊泳である。あたかも私の心は川の中の泳ぎ手であるかのようである。思考、感情、感覚、外界の出来事は川の波および流れである。いくつかは非常に小さく、いくつかは非常に力強い。時々私は川面の近くにおり、上から来る光に近いので、よりはっきり物が見える。かと思ふと、流れが非常に不安定で力強く、水が濁っている、そういう深みに潜っている時もある。

自己想起とは、川の流れによって受動的に押し流される代りに、明確な目標に向かって泳ごうと努めるようなものである。時おり、自分自身を想起し、自分がどこにいるかを知覚し、目標に向かって泳ごうとするのだが、かえって自分が暗い水底にいて、濁った強い流れにとらえられ、それに逆らうことなどほとんど全くできず、まして自分が選んだ目的地に向かって進むことなどできないということを感じ知らされることがある。また、自分自身をよりよく想起し、自分がより透明で静穏な水の中にいると感じ、自分の周囲をよりよく知覚することができ、そして自分の目標に向かって泳いで前進することができる時もある。さらに、頭を水面の上に出し、素晴らしい、きれいな空気を肺一杯に吸い込み、生きていることの喜びに没り、目標をはっきり見据え、それに向かって泳いでいく、そういう瞬間もある。

自己想起は泳ぐことである。光と川の上にある世界は、真正の意識の目標である。川の流れと泥は、われわれ自身の自動化した心と、合意的トランスの中にわれわれを留めるべく働く合意的現実の圧力である。自分がいかに深い闇の中にいるか、そしていかにわずかなことしか自分にはできないかだけが見える、そういう自己想起の瞬間は落胆させられる。けれども、それらの瞬間はきわめて重要なのである。なぜなら、われわれは泳ぐべく努め、泳ごうとする意志を発達させ、そして泳ぎ方を身につけつつあるところだからである。それは筋肉を鍛え上げること似通っている。初めはなんの力もできず、訓練の努力は楽しいものではないが、しかしある日あなたは自分がずっと強くなっている、以前なら大きな負担だったであろう物事を、ほとんどなんの努力もなしにやり遂げていることに気づくのである。

この類比は私自身の体験のいくつかに非常によく当てはまる。私が自己想起を試みる時、あたかも自分が思考と感情の濁った強い流れと闘っているかのように感じられることがしばしばある。

客観意識

グルジェフは、第四の意識状態を、物事をそのあるがままに見ている状態と定義した。それは三つの脳の統一と統合といった第三の意識レベルの全ての特質を持っているが、しかし単なる意識的働きではない、存在 Being の変化の結果として、それらをより水統的なものにする。より厳密に言えば、二つの新しいセンターまたは脳が働き始めるため、あなた自身と世界についての全く新たな範囲の現実を知覚し、理解するようになるのだ。三番目の意識レベルからは、第四の意識レベルのいくつかの

面を理解できるようになる。二番目の合意的トランスのレベルからはごくわずかし理解できないのである。したがって、この議論の意図は第四のレベルを指し示すことにあり、その定義や厳密な記述にはない。それを、われわれの可能性は通常考えられているよりもはるかに大きいということを思い出させるもの、インスピレーションとして受けとめ、文字どおりには受け取らないようにしていたきたい！

第十四章でわれわれは、人間を三脳存在（三つの脳を持った存在）として——まさにわれわれの知的機能を果たす「脳」と同様の、情報を取り入れて処理するための感情センターと身体／本能センターを持った存在として——論じた。グルジェフは、われわれは高次感情センターと高次知性センターというさらに二つのセンターを持つっていると主張した。これら高次のセンターの各々は、通常の感情センターや知性センターよりもつもなく力強く、知性的で、通常のセンターよりはるかに素早く働く。高次感情センターは、合意的トランスの相対的で条件づけられた道徳性とは対照的な、グルジェフが「真の良心」と呼んだものを含んでいる。これらのセンターは共に、人間存在としてわれわれが本来相続してきたものの一部であり、充分に発達していて、働いているのだが、しかしそれらに接触しそれらを活用するための第三レベルの基礎を築き上げるためには、自分の発達への多大のワークを要する。それらはすでに、われわれの自己および現実に関する情報を取り入れ、処理しているのである。しかし、われわれの通常の自己はそれらの出力力から切り離されているのだ。われわれは、普通、それらが存在することさえ知らない。それで私が思い出すのは、仏陀が悟りを開いた後に言ったとされる言葉である。「なんと不思議なことか！ 全ての人は悟っているのだが、そのことを知らないとは！」

高次センターとコンピュータの類比

コンピュータ時代に生きているわれわれには、この状況への優れた類比がある。われわれ一人ひとりが専用の小さなパソコンを持っているということである。それは作動が遅く、小さなメモリーしか持っていないので、ごくわずかなデータしか保存できない。計算には、「知性ベータシク」、「感情ベータシク」、「身体/本能ベータシク」という、かなり原始的な三つのプログラミング言語が使われる。効率的に使えば、通常の生活ニーズの多くを満たすために非常によく機能できる。われわれがこの小さなパソコンを愛し、尊重するのはもつともなことである。なぜなら、たとえ限られているとしても、それは見事な機械だからである。事実、われわれはそれと同一化してしまっており、それが考えることは自分が考えることだと思っているのである。

自分の小さなパソコンに執着し頼るあまりわれわれが忘れてしまったことは、巨大なスーパーコンピュータとわれわれをつなぐための端末としてパソコンが働くよう、それをプログラムする仕方があるということである。このスーパーコンピュータはわれわれのパソコンよりもずっと速く作動し、通常われわれに知られることのないきわめて重要な事実であふれたとてつもないメモリーを持ち、そして知性ベータシク、感情ベータシクおよび身体/本能ベータシク言語では適切に対処できないあらゆる種類の重要な問題を解決することができる、二つの非常に強力かつ高度なコンピュータ言語を計算に用いる。これらの言語とは「高次感情」および「高次知性」言語である。

人生のもつとも重要な問題も、もしスーパーコンピュータがその膨大なデータバンクから適切な知識を引き出して、高次感情および高次知性言語でもって取り組めば、答えることができるだろう。

が、悲しいかな！ われわれはそれとつながっていないのだ。われわれはこれらの非常に重要な問題を自分の小さなパソコンで解決しようとするのだが、ベーシック・コンピューター言語のどれかではそれらを解決できないのである。ハンガリー語のある種のジョークが英語に翻訳されるとその真髓である滑稽味が失われてしまうかもしれないのとちょうど同じように、一定の事柄は高次感情または高次知性言語においてのみ意味をなす。これは、第一章で論じたあの状態特定の知識の一種なのである。

高次の諸状態の知識の言い表わしがたさ

客観意識についてわれわれが持っている通常の、レベル二の知識は、われわれが変性意識状態について知っているわずかな知識と、変性意識の中で起こりうる、われわれが漠然と「神秘体験」と呼んでいる稀な瞬間から来る。人々は、この世でもっとも重要なこととして体験される、自分自身の本性と宇宙への洞察——自分の人生の方向を全面的に変えてしまう可能性があるという理解——を持つ。が、いったん彼らが通常の合意的意識に戻ってそれらを他の人々に向かって、また自分自身に向かってさえ述べると、彼らは通常の思考および言語を使わなければならない。たとえば、「全ての生命は一体だ」、あるいは「神は愛である」、あるいは「すべての現実は無虚であり、かつ充溢している」などなど。

より良い報告者たちは、合意的理解および記述は、彼らがなす最善のことかもしれないが、しかしあまり上等なものではなく、とりわけ自分自身が同様の体験をしたことがない人々にはひどい誤

解さえずえかねないということに同意する。たとえば、高次感情言語で表現された時は完全に明瞭な知識と洞察が、感情ベシックや知性ベシック言語ではひどく誤り伝えられてしまうのだ。まずい報告者たちは、自分の自動化した心によって誤り伝えられ、歪曲されたこれらのより高いレベルの洞察を、文字どおりの真実と混同してしまう。

これが、一定の知識は「言い表わしたい」とわれわれが言う時に意味されていることである。それは通常の意識、合意的トランスの中では理解不可能であるが、しかしなんらかの非通常の意識状態では確かに理解可能であり、わかるのである。状態特定の知識の現実性と重要性こそは、数年前私をしてそれを研究するための科学の創出を提案——専門的な傾向がある読者や科学研究者たちにとつて大きな関心事であるかもしれない提案——させるに至らせた当のものなのである。グルジェフは、みずからの努力によって確実に第四の意識レベルで機能できるようになった人がそこにいると主張した。そのような人々はお互いにきわめて明瞭に意思疎通できることであろう。

高次センターの状態特定性

グルジェフはこれら二つの新しいセンターのことを「高次」と述べているが、変性意識状態に関する私の知識は、それらもまた特殊化しており、状態特定ののではないかと私にうすうす感じさせる。この故に、われわれのコンピューターの類比は、あまりにも拡張されすぎると行き詰まってしまふのである。通常の世界では、小切手帳の帳尻を合わせるために小さなパソコンや携帯用計算機を使うことができるのとちょうど同様に、大型コンピューターを使うことができる。コンピューター本体

は、たとえはるかに多くのことをすることができて、パソコンのあらゆる機能を繰り返し返すことができる。けれども私には、高次知性センターが小切手帳の帳尻を合わせるのに本当に役立つかどうか疑わしい。それは、通常のセンターでは全く解決できない、非常に深遠な問題を扱うことを目論まれているのである。

重要なあらゆることは合意的意識の用語で理解できるべきだというわれわれの主張は、諸センターの間違った働きのもうひとつの例である。通常のセンターは、たとえ通常の無教育な、神経症的レベルに留まる代りに、適切に機能するレベルまで躡（し）げられたとしても、多分、ある種の問題を解決することはできない。変性状態に関する私の研究はこのことを非常に強く示唆している。生と死の意味についての究極の問いは、通常の意識では適切に答えることはできないのである。

もしある人が生れつき全盲だったとしたら、彼は視覚について推論するであろう。彼はなんらかの理にかなった部分的な理解に達するかもしれないが、しかし決して日没の美しさを本当に理解することはないであろう。客観意識について少なくとも何回かの閃（ひら）きを持つまで、われわれは決して充分に人生の本質を理解することはないであろう。

さまざまな変性意識状態およびそれらがわれわれにとって持つ魅惑的な可能性（ならびに罠）について長々と書きたい誘惑にかられるが、しかし本書の焦点は主に、合意的トランスから目覚め、第三の真正の自己意識に到達することにあるので、ここではこれ以上書くことは控えたい。さらに、ゲルジェフが述べたように、われわれが三つの脳の働きを浄化し、洗練させ、かなりの量の自己理解と真正の自己意識を獲得するまでは、われわれが持っている変性状態や客観意識についての個人的な体験やまた聞き知識はひどく歪められかねないので、時にはそれらなしで済ますほうがよいこともあり